

巻頭言

日常を守るために、 気候変動対策の本腰化を

平田 仁子（一般社団法人 Climate Integrate代表理事）



この夏の暑さに、どれだけぐったりさせられたことだろう。

異常な暑さや線状降水帯のニュースを見るのはもはや私たちの日常だ。命の危険や災害リスクは一層高まり、その影響は、体調やメンタルヘルス、森や海の生き物、田畑の作物、仕事や娯楽など、さまざまなところに広がっている。

気象庁は、原因は地球温暖化だと明確に説明する。今年だけでなく、昨年も、それ以前も、そう伝えている。気候変動に関する政府間パネル（IPCC）においては、30年以上前から、熱波も豪雨も氷河の融解も森林火災も海水温上昇も全て予測し、警告してきた。だから、多くの人にとっては、もう知っているよ、という話でもあるだろう。とはいえ、その影響が目の前に迫る危機として「可視化」されるは、さすがに恐ろしい。

だが、もっと恐ろしいのは、それでも化石燃料を大量に燃やし続ける経済活動が平然と続いているという現実である。なぜこれほどに人類は、気候変動対策を軽視し続けるのだろうか。

もちろん世の中はそんなに簡単ではない。既得権益を守ろうとする企業や政治家たちは、今日の経済活動を優先し、変化を阻んでいる。個々人は、「自分にできることは限られる」と自身を過小評価するか、あるいは周りのせいにして、特段の動きを取ろうとしない。昨今の一部の悪しきメガソーラー事業（もちろんそれ事態を改善する必要がある）に絡んで、太陽光発電へのアンチのデマが拡散されていることも、世論に少なからぬ影響を与えている。彼の国では、気候変動自体を否定するリーダーすらおり、「どうせ無理」「自分には関係ない」と目を背ける方が楽でもある。

しかし、どんな理由を並べ立てようと、気候変動問題をなかったことにはできない。「暑いね」と言いながら現状を容認することは、非人道的な行為であり、これから生きる人たちへの人権侵害である。

ではどうでしょうか。地球規模となると、大きすぎて何をどうしていいかわからなくなりがちだ。だが、化石燃料を使って営む人間活動の現場はそれぞれの地域である。課題解決は足元から始めるしかない。今回、ワーカーズコープ連合会の古

村伸宏理事長と対談をさせていただき、そこで大いに一致したのは、気候変動の取り組みは、地域から、足元から、という視点であった。実は、何かやりたいと悶々としている人は少なくない。地域の人たちに、できることがここにある、やってみたらできた、そんな一歩の手応えを得られる場と機会を作り出し、関わる人を増やしていくことは、地道に思えるが、大きなうねりを作り出す上で重要である。ワーカーズコープの労働形態、顔の見えるコミュニティの規模感、地域の人々に寄り添うアプローチは、地域で再生可能エネルギー利用を使う気候変動対策と深い親和性がある。脱炭素の社会作りは、私たちの日常を守ることもそのものであるからだ。だから、ワーカーズコープを軸に思いを持つ人がつながり、実践

の輪を一緒に広げていくことに大きな可能性を感じている。これから連帯して取り組んでいきたい。

.....
<プロフィール> ひらた きみこ

出版社、米・環境団体を経て、1998年NPO法人気候ネットワークに設立時より参加。同法人国際ディレクター等を経て、2022年に気候政策シンクタンクClimate Integrateを設立し、代表理事に就く。2021年ゴールドマン環境賞受賞、2022年英BBC放送の「100人の女性」に選出。主な著書『気候変動と政治』成文堂。千葉商科大学大学院客員教授。市川市環境施策推進参与。早稲田大学社会科学研究科博士課程修了(社会科学博士)。

.....